

### 153 「音楽と私」

音楽と私の関わりをまとめてみた。

私の音楽好きは、父の影響が大きい。父は明大マンドリン部に所属し、マンドリンを演奏していた。父の弟妹（私の叔父・叔母）は芸術的才能に恵まれ絵画を趣味とし、作品を絵画展などに出展していた。

父はテイチクレコードのマンドリン楽団に在籍したことがあり、プロの作曲家とも交流があった。

作詞・作曲家「豊田一雄」氏で「釧路の駅でさようなら」「羽田発7時50分」のほか、「かえりの港」「初めて来た港」「さよなら港」など“港”をテーマにした曲がある。彼の門下生に「アカシアの雨がやむとき」の西田佐知子がいて、デビュー前に父と一緒に撮った写真が残っている。

父の年代は古賀メロディー全盛時代で、私の子供の頃はテレビで歌謡番組をよく観ていた。

私が中学2年生の時、ブラスバンドに必要な新品楽器が導入され部ができた。我々は1期生で、指導教師が体格など楽器への適性を見極め、部員一人一人に楽器を割り当てた。私はバリトンという中型の金管楽器をやることになった。演奏するのは、校歌のほか君が代行進曲などマーチが多く、学校の式典や運動会などでの演奏が主だった。

高校に入学するとブラスバンドの楽器から離れ、ギターの練習を始めた。高1の同級生にクラシックギターが上手いT君がいて、その影響を受けて始めたのである。家にはマンドリンとギターがありすぐにギターを手に取ることができる環境だった。特に誰かの指導を受けたことはなく、「小原安正」のソノシート付教則本で練習したので自己流である。

初めの頃は“セーハ”（全ての弦を人差し指1本で押さえる）ができず苦労した。それでも、大学に入るころには徐々に上達してきた。

当時、クラシックギター学ぶ人は「禁じられた遊び～愛のロマンス」を弾けるようになりたいという人が多かったと思う。私は比較的すんなりと弾けるようになった。

私は、阿部保夫編「古典ギター名曲全集」ソル編（1）（2）、同タルレガ編（1）（2）などの楽譜を買い練習した。この曲集は私にとってかなりレベルが高く、易しい曲を選んで練習した。

タルレガ編曲 J.Sバッハ「無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番～フーガ」は難曲だが、どうしても弾きたくて懸命に練習した。しかし、何とか最後まで弾けるようになったという程度、とても他人に聴かせるレベルではない。

そして、やはりトレモロの名曲「アルハンブラの思い出」である。この曲も練習を重ねて弾けるようになった。弾きたい曲は多くあったが、私のレベルはせいぜいこの程度。

大学卒業とともに建設会社に入社、社会人となった。会社にはマンドリンクラブがあり入部、ギターのパートを担当した。外部から指導者を招き、週1回練習日にマンドリンオーケストラで正統派のマンドリン合奏曲を練習した。年1回の定期演奏会と秋の産業音楽祭への出場が主な目標だった。

入社半年間の基礎研修期間が終わると、新入社員は現場研修に入り、さまざまな現場に配属される。私は運よく本社（京橋）から歩いて5分ほどの現場だったので、週1回の練習に参加することができた。もし、本社から遠い現場で練習に参加できなければ、そこで部活は終了せざるを得なかった。

マンドリンオーケストラにおいて、ギターは伴奏を受け持ちあくまで脇役である。ただ、定期演奏会では、ギターの二重奏なども演目にありそれなりの出番があった。



定期演奏会終了集合写真



ギター二重奏

半年間の現場研修が終わると内勤（建築設計部）となり、終業後の練習も行うことができた。

その後、本社内での異動はあったが、部活に大きな影響なく続けることができたのは運が良かったといえる。勿論業務最優先であり残業も多く、それに加え帰宅後も実務に必要な資格取得（技術士）の勉強など非常に忙しかった。

そんな中、部員で親しかったT君から結婚式に招待された。結婚式で演奏して欲しいというのである。挙式は福岡の「西鉄グランドホテル」、航空券は東京・赤坂にある北九州市事務所に取りに行くようにとのことで??となった。行ってみてわかったのは、何と！T君は北九州市長の息子（次男）だったのである。知らなかった！演奏を引き受けてしまったが、えらいことになったと後悔。盛大な結婚式の場でまともな演奏できるのか？大きな不安の中で当日を迎えたが、式はごく普通の内輪のお祝いだった。緊張の中「アルハンブラの思い出」一曲だけだったが、何とか演奏を終えホッと胸をなでおろした。

入社後10年経過、九州支店への転勤が言い渡された。当然部活はここで終了、九州支店（福岡）での勤務が始まった。T君の結婚式から九州に縁があったようだ。

「85 最近好きな曲」に書いたように、転勤2年後の1984年、偶然見た「西日本新聞」の記事がきっかけで九州での音楽活動が始まった。集まったメンバーの希望でフォルクローレ（南米の民族音楽）をやることになり、私はギターを担当した。フォルクローレ独特の民族楽器“ケーナ”“チャランゴ”や“シーク（パンパイプのような楽器）”は素朴な音色で人気があった。

月1回集まって、主にペルーやボリビアの曲を練習し、何回かステージで演奏したことがある。その中のメンバーとは今でも連絡を取り合っている。

私の好きな音楽は年とともに変化してきた。高校までは主にクラシックを聴いていたが、ラテン音楽はずっと好きだった。それは、私が十代の頃国内で人気があったトリオ・ロス・パンチョス（メキシコ）の影響が大きい。20代の初めころからラテン系音楽の専門誌「中南米音楽」を愛読していた。ラテンの曲はFM放送で聴くか、輸入レコードを入手するしかなかった時代である。

大学のころ、本で音楽理論の基礎を勉強し音階や和音（コード）を知ると、モダンジャズに興味を持つようになった。社会人になり自由にレコードが買えるようになると、毎月何枚もレコードを買った。

トランペット、サクソ、ギター、ベース、ドラムスなどで構成される「カルテット」や「クインテット」の演奏で、順番にソロを取っていく即興演奏の緊張感とテクニックに魅せられた。

フレディハバードの「Sky Dive」というアルバム、ジョージベンソン（ギター）やキースジャレッツ

ト（キーボード）を加えた豪華メンバーで、最初の曲“Povo”のフレディハバードとジョージベンソンのソロがとても気に入っている。

さらに、オスカーピーターソン・ピアノトリオの当時のレコードはほとんど買った。特に好きなのは“Nica's Dream”という曲、サロンの演奏でスウィングするときの息使いまではっきりと聴きとれる臨場感がいい。

モダンジャズの興味から、ジャズの雰囲気を持つブラジルのバーデン・パウエルのギターに惹かれた。バーデン・パウエルは即興演奏主体で、そのテクニックは超絶！コード進行の感覚は天才的で素晴らしい、憧れのミュージシャンである。それをきっかけに幅広くブラジル音楽を聴いた。

次に、音階やコードの知識から、独特の音階と多彩なリズムを持つフラメンコに興味を持った。

最初は“変な音楽”と思いむしろ敬遠していたのである。しかし、曲を聴き知識が深まっていくとその魅力の虜になった。まさに“フラメンコの沼”にはまってしまったといえる。

「112 フラメンコ」で書いたように、フラメンコはカンテ「唄」、バイレ「踊り」、トーケ「ギター」三位一体の民族音楽で、流浪の民「ヒターノ（ジプシー）」の“苦しみ”“悲しみ”や“歓び”を表現する。人生のさまざまな感情を、スペイン各地独特の音階やリズムで生き生きと伝える。

フラメンコの大きな特徴は、むき出しの感情で唄う“カンテ”である。格好良く唄おうとか、美しい声で唄おうとかではなく、むしろしわがれ声やかすれ声、叫び声に似た声で体裁など全く関係なく、生の真剣な芸で迫ってくる。そんな唄を聴くと、どうしても詩の意味を知りたくなった。

フラメンコにのめり込んでいた私は、入社後しばらくして、スペイン語の勉強を始めた。週1回、御茶ノ水の某外語学院のスペイン語教室に通い、スペイン人講師の授業を受けた。

1年半ほど経ったころ、教室の仲間からスペインに行こうという話が持ち上がり、初めてスペインを訪れた。その後、計7回スペインを訪れ、セビリアに友人がでる現在も家族ぐるみの交流が続いている。

セビリアはアンダルシア地方の中心都市で、フラメンコの中心地でもある。短期の旅行では満足できなかった私は、定年退職後1か月半、セビリアに滞在し思う存分フラメンコに浸って来た。

「フラメンコ好き」は現在も続いており、ずっと変わることはないだろう。

フラメンコ以外では、中南米音楽全般 アルゼンチンのサンバ[Zamba]、ブラジルのショーロ[Choro]、キューバのサルサ[Salsa]など、それとラテンポップスなども良く聴く。

中南米やカリブ海の国々についても数回訪れ、旅先で知り合うとどんな曲が流行っているか、人気の歌手は誰かなど教えてもらい、そのCDを買ってくる。

今はユーチューブで世界中の音楽を自由に楽しむことができ、音楽好きにとってとても良い時代になった。（2024, 06, 16）